仏教に見る環境保全の精神と現代タイの生活

パッタラポーン・シリカンチャナ

はじめに

現在、多くの人が環境問題やそれに対する責任について自覚するようになりました。それというのも、人々が自ら環境の危機や災害に直面しているからです。強欲や無責任と一体になった近代化は、私たちの環境と生活の質（ＱＯＬ）をますます脅かすようになっているのです。いかなる種類の開発も、道徳心と倫理の育成を基調とする「人間の開発」なしには、価値がありません。今日私たちは、誤った開発の道をたどっています。それをもたらしたものは、教育の欠如であり、正しい動機の欠如であり、正しい見識の欠如です。この病んだ社会を治癒するには、持続可能な開発が絶対に必要なのです。

環境に対する配慮は、いくつかの論文や書物が示す通り、おそらく一九七〇年代後半あたりに形成されたと考えられます。高僧ポー・オー・パユットー師（現在の欽賜名はソムデット・プラプッタコーサーチャーン）は、今日の環境問題には、①天然資源の破壊と②廃棄物の世界的な増大があると説明しています。天然資源の破

壊の一例は森林伐採であり、地球温暖化や干ばつを引き起こしています。また、廃棄物の世界的な増大により、地上や水中での廃棄物の過剰蓄積がやはり問題化しています。[1]

今日の環境問題は極めて危機的であるため、「環境と開発に関する国連会議」が一九九二年六月三日から十四日に、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催されました。それは、一九七二年六月十二日にスウェーデンのストックホルムで採択された「人間環境宣言」を再確認する会議でした。ここでの「環境と開発に関するリオ宣言」は、一九九二年十二月二十二日、第四十七回国連総会で承認を得ます。宣言に盛り込まれた原則をいくつか記します。

第一原則　人々は、持続可能な開発への関心の中心にある。人々は、自然と調和しつつ健康で生産的な生活を営む権利を有する。

第九原則　各国は、科学的及び技術的な知見の交換を通じて科学的な理解を改善させ、また、新しくかつ革新的なものを含む技術の開発、適応、普及及び移転を促進することにより、持続可能な開発のための各国内の対応能力の強化のために協力すべきである。

第二五原則　平和、開発及び環境保護は、相互依存的であり、不可分である。[2]

一九九二年の「リオ宣言」の後、アメリカの多くの大学で環境倫理〔の研究〕がさかんになり始め、現在は、それに関する著作や論文が、ほぼ毎週のように出ています。「リオ宣言」は「地球憲章」を後押ししてきました。「地球憲章」は、持続可能な生活様式と持続可能な人間の開発への移行に焦点を当て、生命共同体への敬意と配慮、生態系の保全、社会的・経済的公正、民主主義、非暴力と平和を提唱しています。

持続可能な開発とは、経済発展において、環境や生態系の保全への配慮を不可欠な要素とするものです。それは天然資源を保護しながら、貧困を減少させていきます。それゆえに、「地球憲章」でも持続可能な開発

が強調されているのであり、憲章は、私たちの環境問題と経済的、社会的、政治的、精神的問題とは相互に結びついていることを訴えています。地球憲章は最終的に、二〇〇〇年、パリのユネスコ本部で地球憲章委員会によって承認されました。

私たちのハイテク開発は間違いであることが、現在、すでに明らかになっています。それは、自然に逆らい、生命を危険にさらすものなのです。

今日の環境への配慮

今日、人間の生活は、過去には知られていなかった深刻な環境の危機に直面しています。人類は、自分たちが道徳意識を高め、自然への敬意を学ぶ必要があることを認めなければなりません。私たちの〔心の〕けがれ、すなわち貪りや憎しみや誤った思い込みは、自然の崩壊を招きます。私たちは、自然やすべての自然環境について、人間自身の開発に寄与してくれる存在として考えるべきです。このような姿勢が、自然に対する人間の攻撃性を和らげ、人間が環境の友となり、環境と平和に暮らしていけるようにしてくれます。経済生活と技術利用に関しては、「足るを知る」生活を送らねばなりません。つまり、必要な物だけを、そして本当に必要な量だけを消費する生活です。浪費する生活を回避し、放棄することです。そして、科学や技術も、自然環境に配慮しつつ、「足るを知る」生活に資するためだけに利用すべきです。このような思想と実践によって、持続可能な開発が可能になり、私たちは環境からの恩恵を最大限に享受できます。換言すれば、今日、環境への配慮に関して、自然に対する一層の理解と責任が求められているのです。私たちは、自らを変革し、自然のあり方に順応していく必要があります。仏教をはじめとする世界宗教は、信徒に対して、自然〔の理〕に従って生きるよう常に促しています。自然〔の理〕に逆らった生活は、自らを不幸へと導くのです。

仏典の多くの章句が、環境への配慮と自然の保全を促しています。たとえば、パーリ三蔵（*Tipiṭaka*）の律蔵（*Vinayapiṭaka*）では、僧侶による草木の伐採が禁じられています。なぜなら、草木もまた生ける衆生の一員と

見なすからです。概して、仏教を信仰するほとんどの国々で、民衆は自然の近くで暮らし、農業や畜産などに従事しています。自然〔の理〕に従った生き方を学び、自然環境から恩恵を受けているのです。増支部経典（*Aṅguttaranikāya* パーリ三蔵の経蔵の一部）二の三十二で、ブッダは信徒に、暮らし、学び、働くのにふさわしい環境を選ぶよう教えています。それは善き人生と繁栄と平和を最後に勝ち取るためです。(3)

仏教徒は、「戒の具足（*sīla-sampadā*）」すなわち道徳的指針の体現を教示されます。その目的は、秩序だったライフスタイル、善き行動、善き労働、善き環境について知るためです。それらのすべてが個人の成長を促してくれるのです。仏典を通じて、私たちは、基本的なレベルのモラル、たとえば社会との関係や自然との関係における正しい振る舞い方を学ぶのです。

仏典には、人間以外の衆生（生きもの）への敬意や、それらの生きものと人間を支える自然環境への敬意が示されています。たとえば律蔵には、ウデーナ王とブッダの侍者アーナンダ（阿難）の会話が次の通りに明かされており、アーナンダがいかに自然保護を気にかけていたかがわかります。

アーナンダよ、あなたがたは、〔新しい衣を得たために不要になる〕古い傷んだ衣をどうするつもりですか。

大王よ、上覆い〔衣服の汚れを防ぐために上に着る服〕を作ります。

アーナンダよ、あなたがたはその上覆いが古びたら、どうするつもりですか。

大王よ、夜具の覆いを作ります。

アーナンダよ、あなたがたは、その夜具の覆いが古びたら、どうするつもりですか。

大王よ、地上の敷き具を作ります。

アーナンダよ、あなたがたはその地上の敷き具が古びたら、どうするつもりですか。

大王よ、足拭きの布を作ります。

アーナンダよ、あなたがたはその足拭きが古びたら、どうするつもりですか。

大王よ、雑巾を作ります。
アーナンダよ、あなたがたはその雑巾が古びたら、どうするつもりですか。
大王よ、これを裂いて、泥に混ぜ、地床を塗ります。(5)

アーナンダの答えを聞いて大いに喜んだウデーナ王は、もともと王の侍女たちが布施していた五百枚の衣に加えて、さらに五百枚の衣を布施しました。

仏教の知識と実践は、環境保護と開発にとって極めて重要です。仏教は、自身のけがれを乗り越えるための人間の智慧と努力を深く信じており、この信頼によって環境倫理を前進させてくれます。西洋哲学が宇宙や他の生き物を支配することを人間に促すのとは対照的に、仏教哲学は〔人間が〕自身のけがれを乗り越え、自然の法に従って生きとし生けるもののために暮らせるよう智慧を使い慈悲の心をもつことを後押しします。仏教徒は、自然や他の生きものを搾取するよう訓練されるのではなく、自然を愛し、生きるものすべてを愛するように教わります。たとえば仏典は、ブッダの二人の高弟サーリプッタ（舎利弗）とマハーカッサパ（大迦葉）の言葉を取り上げていますが、二人は精神性の向上に有益な自然の美を次のように見出しています。

サーリプッタ：〔人のいない〕森は楽しい。世人が楽しまない処において、貪りを離れた人々は、楽しむであろう。かれらは、快楽を求めないからである。
マハーカッサパ：清く澄んだ水あり、ひろびろとした岩盤あり、黒面の猿と鹿がいて、水と苔で覆われている岩山は、わたしを楽しませてくれる。(6)

サーリプッタとマハーカッサパの言葉から、自然環境は、それを観賞する者に喜びをもたらすのみならず、精神的修行を支えてもくれることがわかります。その意味でも、自然環境の保護は人間にとって価値があるのです。

仏教に見る環境保全と今日のタイへの適用

パーリ三蔵に記されたブッダの暮らしと教えから、ブッダが環境に対し配慮していたことがよくわかります。ブッダは、生涯を通して、自然の近くで修行しました。彼は、人里離れた静かな森や荒野が、瞑想や悟りの探求に適していると考えました。森や荒野以外にも、ブッダと弟子たちは、洞窟や樹下、崖下などに好んでとどまりました。誘いを受け、街やその近くに滞在するときだけ建物に住んだのだろうと思います。注目すべきは、仏教徒として環境を配慮する教えが、戒律にいくつかはっきりと説かれていることです。僧侶は、雨期の間、一定の場所に定住しなければなりません。これが仏教でいう雨安居（うあんご）の時期です。ブッダの在世、弟子の僧侶たちは、季節に関係なく、場所から場所へ遊行していました。僧侶たちは、〔雨期に〕青々と伸びる草を、つい踏み潰したり、〔雨期に活動が活発になる〕野原の小動物を傷つけてしまい、そのため村人から非難されます。そこでブッダは、雨期の三カ月間には定住すべしとする僧団の規則を定めたのです。(7)

環境保全は、持続可能な開発を通じて実現できます。ですから、仏教が説く持続可能な幸福に関する教えを考慮すべきなのです。教えには、次のようにあります。

一、自らの努力と道徳的行いの結果として財を手にするという幸福
二、自分自身や家族、貧困にある者、公共の福祉のための財を手にするという幸福
三、少しも負債がないという幸福
四、非難される行いをしていないという幸福(8)

たとえば、ブータンの国王と国民は、とりわけ信心深い仏教徒です。彼らは、つつましい、しかしながら「足るを知る」生活を送っています。物質主義や近代技術に囲まれて生きることよりも、自然とともに自然環境のなかで生きることを選択しています。ブータンの人々が目指しているのは、ＧＮＨすなわち国民総幸福の考えを実現することです。ブータンは、低収入で質素な

生活スタイルをもった貧しい国と思われがちですが、人々は仏教に根差した暮らし方に満足しているのです。

タイの国民は、故プーミポン・アドゥンヤデート国王による「農村の干ばつ対策の新理論」を通して、自然〔の理〕に従って生きることや、「足るを知る」生活に幸福を見つけることを学んでいます。この理論は、一家族当たり平均六エーカー（二万四千平方メートル）の土地を所有する農民が、それぞれ土地を四分割して最大利益を獲得するという考えです。まず、土地の三〇パーセントを掘って貯水池を作り、魚を飼い、乾季にその水を利用できるようにします。次の三〇パーセントの土地は米をつくるために用い、家族を一年養っていける量を収穫します。三つ目の三〇パーセントの土地は野菜や果樹栽培のために用い、それらを自分たちで食し、販売します。残り四つ目の一〇パーセントの土地は、家を建て、家畜を飼い、小さな食用植物を育てるために用います。[9] このような土地管理により、農民は生涯を通して満ち足りた生活を送り、あらゆる困難を克服できるようになります。

仏教が説く環境への配慮は、木々や森林、無生物だけに限られません。ブッダは、動物に対する愛情や慈悲についても強く説いています。パーリ三蔵には、このようにあります。

足のないものを慈しみ
二足のものを慈しみ
四足のものを慈しみ
多足のものを慈しむ[10]

タイの人々は大部分が信心深い仏教徒であり、多くの人が動物に愛情を注いでいます。それだけでなく、十年ほど前からは動物の保護や保全のために積極的に活動するようになりました。たとえば、国立象研究所がタイ北部のランパーン県に設立されました。これは、故ガラヤニ・ワッタナー王女〔プーミポン国王の姉君〕の後援によるものです。それは、ちょうどランパーン県にある複数の行政機関が、林業機構と協同して、県のドイ・パ・ムアン野生生物保護区の森林に象を帰す取

り組みを行っていたときでした。設立以来、国立象研究所のスタッフが、保護区に放された象の世話役をしています。

国立象研究所はもともと、子象のトレーニングセンターにすぎませんでした。その後、タイ象保全センターとなり、二〇〇二年、ガラヤニ王女の後援で、国立象研究所へと発展しました。

国立象研究所は、象を世話し保護する責務を担っています。象のための病院があり、数人の獣医がいます。研究所は無料で象の面倒を見ています。さらに、シリキット王妃〔現・王太后〕の主導で、林業機構による獣医訪問プロジェクトが行われています。これは、病気になった象の治療や健康診断のために、獣医をタイ全土に派遣するものです。

環境保全と開発の取り組みについては、故プーミポン国王が最も優れた模範であられます。国王は、農作業を行うタイの人々に対し、天然資源を保全し、自然〔の理〕に従って作業するよう促してこられました。山岳民族の人々には、ベチベルソウ（ベチバー）を育てるよう助言され、山腹の斜面を出水による破壊から守ろうとされました。ベチベルソウは、非常に長い根を土の中にしっかりと張り巡らせるため、土壌や〔土中の〕水を保全するのに適しています。つまり、天然の壁として、水流のスピードを遅らせるわけであり、それによって植え付けに十分な湿気を土壌のなかに保持することもできます。ベチベルソウの植え付けを利用するという国王のアイデアは、世界の多くの指導者に高く評価されるところとなりました。国王は、自然の保全や自然環境の保護だけでなく、地球温暖化を軽減するための活動に対しても称賛を受けました。一九九三年二月二十八日、国際砂防協会は国王に「国際功労賞」を贈りました。さらに国連は二〇一三年、国王の誕生日にあたる十二月五日を「世界土壌デー」と宣言し、〔二〇一五年を〕国際土壌年にする旨を定めたのです。(11)

おわりに

現在、タイの多くの仏教徒が環境保全の価値に気づき始めています。野生動物は、森林でほとんど食料を

見つけられず、村落付近との境界をうろついています。政府やボランティア団体は、そうした野生動物を救助しようと尽力しています。私たちは自然の一部です。自然が破壊され、自然環境・社会環境がそこなわれれば、幸せに暮らすことはできず、生き残ることも困難です。環境に対する配慮は、私たちの世代だけにとどめるべきでなく、次の世代へと広げていかなければなりません。それが、世界全体を救うことになるのです。

〔　〕内は邦訳に際しての補注

注

（1）P. A. Payutto, *Karn Pattana Tee Yang Yeun*［持続可能な開発］(Bangkok: Sahadhammic Press, B.E. 2541/C.E. 1998), pp. 31-46.（タイ語）

（2）Louis P Pojman, Comp. *Environmental Ethics: Readings in Theory and Application* (Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1998), pp. 566-568.【訳注】「環境と開発に関するリオ宣言」菅野和夫・江頭憲治郎・小早川光郎・西田典之他（編）『六法全書 平成18年版Ⅰ』、有斐閣、二〇〇六年、二七二三頁

（3）P. A. Payutto, *A Constitution for Living. The Pali Canon: What a Buddhist Must Know* (Bangkok: Printing House of Thammasat University, B.E. 2551/C.E. 2008), p. 38.【訳注】「四集 第四 輪品」にある、四輪すなわち「適宜の地に住むこと、善士に仕ふること、己を正しくあらしむること、及び前に福を作れること」(『南伝大蔵経 増支部経典二』第十八巻、五九頁。以降、旧漢字は現代表記に改めた）のうちの、「適宜の地に住むこと」を参照した。

（4）【訳注】王は、自身の侍女たちが阿難に五百枚もの新しい僧衣を布施したと聞き、それを平然と受け取った阿難に対して怒りを覚えて、追及した。「小品 第十一 五百〔結集〕犍度」『南伝大蔵経 律蔵四』第四巻、四三五頁を参照した。

（5）Cuhlavagga XI, 13-14: Vinaya II. 290-292, translated by G.A. Somaratne in Most Venerable Phra Brahmapundit, Chief Editor, *Common Buddhist Text: Guidance and Insight from the Buddha* (Phra Nakhon Si Ayutthaya: Mahachulalongkornrajavidyalaya University, 2017), pp. 490-491.【訳注】前掲「小品 第十一 五百〔結集〕犍度」、四三五－四三六頁を参照した。

（6）Theragāthā 992 and 1070 translated by Peter Harvey in op. cit. *Common Buddhist Text*, p. 440.【訳注】中村元（訳）『仏弟子の告白―テーラガーター―』、岩波書店、一九八

六年、一八八、一九八頁

(7) Henry Clarke Warren, ed. and trans., *Buddhism in Translations* (New York: Atheneum, 1974), pp. 414-417.

(8) 前　掲 *A Constitution for Living, The Pali Canon: What a Buddhist Must Know*, p. 44.【訳注】「四集第一一適切業品」にある、四の楽すなわち「所有の楽、受用の楽、無債の楽、無罪の楽」(『南伝大蔵経 増支部経典二』第十八巻、一一九－一二〇頁) を参照した。

(9) Pragas Wacharaporn. *Phra Raja Panithan Nailuang*「国王の御決意」(Bangkok: Prapansarn Printing, B.E. 2542/C.E. 1999), pp. 205-207.（タイ語)【訳注】Nicholas Grossman, Dominic Faulder and Yvan Van Outrive et al. (eds.) *King Bhumibol Adulyadej, A Life's Work: Thailand's Monarchy In Perspective* (Bangkok: Editions Didier Millet, 2012), p. 271.

(10) Culla-Vagga (v.6) in op. cit. *Buddhism in Translations*, p. 303.【訳注】「小品第五小事犍度」『南伝大蔵経 律蔵四』第四巻、一六九頁を参照した。

(11) The National Identity Foundation, *Royal Activities and International Cooperation* (Bangkok: Rungsilp Press, B.E. 2558/C.E. 2015), pp. 100-104.

Pataraporn Sirikanchana／世界仏教徒大学前副学長。タマサート大学名誉教授、タイ学士院準会員。哲学・宗教学とくに仏教学が専門。米ペンシルベニア大学で博士号（宗教）を取得。次のような多くの著作・論文がある。*In Search of Thai Buddhism*, Thammasat Printing House, 2012, *A Guide to Buddhist Monasteries and Meditation Centers in Thailand*, Printing House of Thammasat University, 2004, 'Buddhism and Global Governance' in *Toward a Global Civilization? The Contribution of Religions*, Peter Lang Publishing, Inc., 2001.